

## 「降りて来られる方」

ルカの福音書 9:37~45

### はじめに

過去二回に渡って「変貌山の奇蹟」と呼ばれる、イエシュアが一時的にその本来の姿を現わされ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人の弟子たちはそれを目の当たりにし、さらにそこに旧約の預言者モーセとエリヤが現れたという出来事について、そこに秘められた神のご計画、「神の国」の奥義を解き明かしてまいりました。そのおもな内容としては、この出来事の冒頭が「祈るために山に登られた」と記されていることから、神のおられるところに登る、上ること、それはすなわち天に上ること、引き上げられることを指し示し、それはイエシュアの復活の後によみがえり、イエシュアが弟子たちを離れて天に上られる際、雲のようにイエシュアを取り囲み、雲のように上って行った①旧約時代の多くの聖なる人々、そして同じようにやがて復活し、携挙される新約の聖徒と呼ぶべき②私たち教会を指し示していると述べ、そしてその携挙の際、地上において大きな患難を通る③イスラエルの残りの者たちが起こされるということ、これら三つの存在の「型」が三人の弟子たちによって指し示されていると述べました。また時空を越えて現れたモーセとエリヤについては、黙示録に預言された「二人の証人」を直接的に指し示すものであると述べ、さらにペテロが意味もわからず幕屋を三つ建てると言ったことについては、これは預言であり、かつて建てられたエルサレムの二つの神殿と、やがて建てられる同じくエルサレムの第三神殿を指し示しており、これらの存在についての記述は、すべて目に見える形をもって表される、聖書に記された世の終わりを指し示す確かなしるし、証拠としての存在または出来事であり、霊的、預言的などという宗教的な言葉で片づけられない、まさにリアル、誰の目が見ても明らかな、神のご計画の成就、実現を指し示しているものであると述べました。

そしてその続きとなる今日の冒頭は、前回のそれとは逆に「[次の日…山から下りて来る](#)」ことから始まる出来事となっています。ということはここに記されている内容はもちろん神のおられるところから、すなわち天から地に降りて来られるイエシュアの、その地上再臨についての奥義が秘められた箇所であると予想することができます。ではその内容に入ってまいりましょう。

### 1. 曲がった時代

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:37 次の日、一行が山から下りて来ると、大勢の群衆がイエスを迎えた。

9:38 すると見よ、群衆の中から、一人の人が叫んで言った。「先生、お願いします。息子を見てやってください。私の一人息子です。」

9:39 ご覧ください。霊がこの子に取りつくと、突然叫びます。そして、引きつけを起こさせて泡を吹かせ、打ちのめして、なかなか離れようとしません。

9:40 あなたのお弟子たちに、霊を追い出してくださいとお願いしたのですが、できませんでした。」

9:41 イエスは答えられた。「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。あなたの子をここに連れて来なさい。」

9:42 その子が来る途中でも、悪霊は彼を倒して引きつけを起こさせた。しかし、イエスは汚れた霊を叱り、その子を癒やして父親に渡された。

イエシュアは悪霊にとりつかれた一人の子と、それを癒すことができない弟子たちとを見られ「ああ、不信仰な曲がった時代だ」と言われました。偶像、偽りの神々、聖書の真理から外れた人間的な教えや考えが、当時の世界には蔓延していたため、それがまさにこの状況に象徴されているとして、イエシュアはこのように言われたのです。この「不信仰な曲がった時代」は、今日もなお継続中です。いやさらにいつそう状況は悪化の一途をたどっています。この状況を改善することはイエシュアの弟子たちでは無理、決して成し遂げられないということがここには表されているのです。つまり借りてきた御名や権威ではなく、イエシュア・ハマシアハご自身でなければならない、イエシュアが来なければ、イエシュアが再臨されなければ問題は一つとして解決しない、敵は退けられない、神の与える平安は来ないのです。ここで山を下り、子どもにとりついた悪霊を追い出し、これを癒されたように、やがてイエシュアは再びこの地上に来られ、神に敵対するすべての者を退け、イスラエルを再興し、全地を癒され「神の国」をお建てになります。その事実が、神のご計画がここには表されているのです。ちなみに「不信仰な曲がった時代」という言葉は申命記 32:5 からの引用です。そこにはこう預言されています。

申命記【新改訳 2017】

32:5 自分の汚れで主との交わりを損なう、主の子らではない、よこしまで曲がった世代。

32:6 あなたがたはこのようにして【主】に恩を返すのか。愚かで知恵のない民よ。主はあなたを造った父ではないか。主はあなたを造り上げ、あなたを堅く立てた方ではないか。

32:7 昔の日々を思い出し、代々の年を思え。あなたの父に問え。彼はあなたに告げ知らせる。長老たち  
に問え。彼らはあなたに話す。

32:8 いと高き方が、国々に相続地を持たせ、人の子らを割り振られたとき、イスラエルの子らの数にしたがって、もろもろの民の境を決められた。

32:9 【主】は、測り縄で割り当て地を定められた。ご自分の民、ヤコブへのゆずりの地を。

このようにイエシュアは「不信仰な曲がった時代」という言葉を単なる非難、嘆きとして語られたのではなく、上記の預言すなわちイスラエルと国々を定め、治めることになる「いと高き方」神の御子メシアであるご自分を指し示して語られたのです。つまり、神のご計画は初めからイエシュアご自身によってこの「不信仰な曲がった時代」「よこしまで曲がった世代」を変えることになっているのです。ですからそれは決してイエシュアの弟子たちによるものではないのです。

イエシュアの御名の権威を使って、イエシュアのように何かを成し遂げよう、奇蹟を起こそうと考えている人は、イエシュアが来られることを望んではいません。その人はただイエシュアの力が欲しいだけなのです。自分の思い通りに神の力を行使したいのです。悪霊を追い出せなかった弟子たち、それはイスラ

エルの霊的指導者たちの「型」であり、また今日の私たち教会の姿でもあります。かく言う私自身、自分の願いどおりに神に動いてほしいと祈ってしまうその一人です。では祈ってはいけないのか、祈っても無駄なのかと思われる方はいますか、その方にお聞きしたい、祈りとは何でしょうか？祈りとはあなたの自由に用いて良いものなのでしょうか？祈りとは本来、このように祈りなさい、と神に命じられたままにささげるものであり、つまり神の御心にかなった出来事を指すのものなのです。この祈りによって、ただ主の御心だけになるのです。この真理を知らず、受け入れず、御心も理解しないままに祈るなら、その祈りをいったんやめて、御心が何であるかを、聖書の御言葉からまず聞いていただきたいのです。そしてそれを受け入れ、その御言葉が、その御言葉だけが成るように祈っていただきたいのです。ですが主の御心について、私たちはすでに何度も何度も聞いているはずです。この地に「神の国」を建てる、それがただ一つの主の御心、願い、ご計画であり、私たちが祈るべき祈り「御国が来ますように」というイエシュアが弟子たちに教えたあの祈りです。しかし今日、残念ながらこの「**不信仰な曲がった時代**」に生きる私たちはこれを理解して祈ってはいません。イエシュアの「**ああ、**」という怒りにも似た嘆きの声がここにも響いてきそうです。

しかし、イエシュアのこの「**ああ、**」という声を聞いて、自分の信仰のなさや罪深さ、愚かさに落ち込んだり、悔やんだり、ましてや誰かのそれを非難したりするのならば、それこそ御心を知らない、とんだ誤解、思い違いをしています。なぜならこの「**ああ、**」は本来、生きている人間に投げかける言葉ではないからです。

#### I 列王記【新改訳 2017】

13:30 彼が遺体を自分の墓に納めると、皆はその人のために、「**ああ、わが兄弟**」と言って悼み悲しんだ。

これは「**ああ、**」と訳されるヘブル語ホーイ(אָהוּ)が聖書で最初に使われた箇所です。このようにホーイは本来、「**遺体**」すなわち死人にかける言葉だからです。死んだ人間はもはや何も考えられず、何も言えず、何もできません。神の目、イエシュアの目にはもはや全地は、人はみな死んでいるのです。実際に地上のすべての人はやがて必ず死にます。生まれながらにして死はすでに定まっています。そのような人という存在に対して、実際のところ神は何も期待してはおられないし、何もお任せにはなりません。任せたところで永遠に生きておられる神の基準にはとうてい及ばないことは明らかですし、失敗することは目に見えています。

ではなぜ今私たちはこのように生かされ、働いているのか、と思われるのでしょうか。それはここでの弟子たちのように、自分たちだけでは決してできないということを知るためです。そして、イエシュアがおられなければ、イエシュアが来られなければ、神のご計画は何一つ完成、完了しないことを知るためです。ですから私たちは決して自分は神のために何かを成し遂げた、または成し遂げられると思っはなりません。たとえそのように見えたとしてもそれはほんの一瞬であり、すべては過ぎ去り、忘れ去られ、人の存在と同じく死んでなくなります。ですから私たちが見るべきなのは、自分自身でも自分の生き方でも働きでもなく、ただイエシュアだけが死から人をよみがえらせ、神のご計画を完遂し、サタンも悪霊もそれに従うすべての悪しき子どもをも退け「神の国」をお建てになることができるということ、ただこの一事な

のです。そのようにしてすべての賞賛、誉れ、栄光、栄誉がただ主イエシュアにのみ与えられるようになることこそが、父なる神の御心、ご計画であり、私たちの祈るべき祈りなのです。

## 2. 渡される

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:43 人々はみな、神の偉大さに驚嘆した。イエスがなさったすべてのことに人々がみな驚いていると、イエスは弟子たちにこう言われた。

9:44 「あなたがたは、これらのことばを自分の耳に入れておきなさい。人の子は、人々の手に渡されようとしています。」

「人の子は、人々の手に渡されようとしています」このフレーズは多くの場合、イエシュアの受難、十字架を指し示すものとして理解されます。もちろんそのような意味合いもあるとは思いますが。しかし、悪霊を追い出す権威を行使され「神の偉大さ」を人々に表された、その直後の言葉としては、この解釈はいささか一貫性に欠けます。十字架の御業は人の罪の贖い、赦しの御業であり、悪魔サタンや悪霊どもに対して命じたり退けたりするものではないからです。しかしこれをヘブル語で解釈するならば、前の出来事とここでのイエシュアの御言葉とのつながり、同義的、補足的な意味を見出すことができます。「人々の手に渡されよう」との「渡す」と訳されるヘブル語はマーサル(מָרַס)といいます。その最初の言及を見てください。

民数記【新改訳 2017】

31:1 【主】はモーセに告げられた。

31:2 「あなたは、イスラエルの子らのために、ミディアン人に復讐を果たせ。その後で、あなたは自分の民に加えられる。」

31:3 そこでモーセは民に告げた。「あなたがたのうち、男たちは戦のために武装せよ。ミディアン人を襲って、ミディアン人に【主】の復讐をするためである。

31:4 イスラエルのすべての部族から、部族ごとに千人を戦に送らなければならない。」

31:5 それで、イスラエルの分団から、部族ごとに千人、すなわち、合計一万二千人の、戦のために武装した者たちが選ばれた。

31:6 モーセは部族ごとに千人を戦に送った。また彼らとともに、祭司エルアザルの子ピネハスを、聖なる用具と吹き鳴らすラッパをその手に持たせて、戦に送り出した。

31:7 彼らは【主】がモーセに命じられたとおりに、ミディアン人に戦いを挑み、その男子をすべて殺した。

31:8 その殺された者のほかに、彼らはミディアンの王たち、すなわち、エウィ、レケム、ツル、フル、レバの五人のミディアンの王たちを殺した。また、ベオルの子バラムを剣で殺した。

これはイスラエルのミディアン人への復讐、報復としての戦を記したものです。ここでその戦のために一万二千人が「選ばれた」という箇所聖書で最初のマーサルがあります。このようにマーサルとは本来、

イスラエルの敵に復讐するために選ばれた者を指し示す言葉なのです。上記の戦では一万二千人のイスラエルの子らがマーサル、選ばれましたが、この地上からすべてのイスラエルの敵、すなわちイスラエルの神である主に従わないすべての国々を打ち滅ぼすための戦にマーサル、選ばれる、人々の手に「渡される」戦士はたった一人であり、それはもちろん人の子であり神の御子であられるイエシュアただ一人です。このような事実が秘められた御言葉が「**人の子は、人々の手に渡されようとしています。**」なのです。ただイエシュア一人だけが神のご計画を成し遂げる唯一の御方であるという事実が、この前の事実と見事に結びついていることをぜひ覚えていただきたいのです。確かにイエシュアは人々の手に渡され、十字架にかけられ、殺されます。しかし神のご計画はそれで完了、完成ではないのです。そのイエシュアの十字架の死によって何が起り、最終的にどうなるのか、この御言葉はそこまで指し示しているのです。当時の弟子たちはこの御言葉がイエシュアの十字架を指し示していることさえも理解していませんでしたが、今の教会ではそれが理解されています。しかしさらに秘められた奥義として、今日このように開かれていることを覚えてください。これはその現れの時が近づいている証拠です。神のご計画のなるその日、主の日が近いことをぜひ知り、聖書にはまだまだ秘められた奥義があることを知ってください。

### 3. 隠されていた

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:45 しかし、弟子たちには、このことばが理解できなかった。彼らには分からないように、彼らから隠されていたのであった。彼らは、このことばについてイエスに尋ねるのを恐れていた。

「彼らには分からないように、彼らから隠されていた」とあります。ヘブル語で「隠す」ことをアールム(אָרַם)といい、「永遠」という意味のオーラーム(אָרַם)につながる言葉です。生まれながらにして死が定まっている人にとって「永遠」という概念、死ぬことがなく永遠に生きるという発想は、まさに隠された、触れること、手に入れることのできない事柄と言えます。以下の記述はこの人の目に隠された「永遠」オーラームの最初の言及です。

創世記【新改訳 2017】

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりようになり、善悪を知ようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

3:23 神である【主】は、人をエデンの園から追い出し、人が自分が取り出された大地を耕すようにされた。

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

このように、神である主は人をオーラーム「永遠」に生きるものとする「いのちの木」から人を遠ざけ、その手の届かないものとし、さらに「いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣」を置かれました。もはや私たち人の側からこれに触れることはもちろん、近づくことさえ不可能とな



ったのです。天の御座の守護者、神殿の至聖所の守護者であるケルビムは神に油注がれた者以外の侵入を絶対に許しませんし、炎の剣はすべてを焼き尽くし殺します。「永遠」を得るために、もはや人の側にはなすすべはありません。しかし逆側からならば希望があります。つまり「いのちの木」の方がケルビムと炎の剣を通り抜けて人のもとに近づいて来るとしたらどうでしょう。そんなことはありえないと思われるでしょうか、神は実にそのひとり子イエシュアをそのようななされたものではありませんか。油注がれた者、メシアとして、そして十字架によって殺されることによって、いまや「永遠」の「いのちの木」はすでに私たち人のもとに来てくれました。そして終わりの日に再び来てくださいます。風の翼とも呼ばれるケルビムに乗り(Ⅱサム 22:11)、その御口に両刃の剣よりも鋭い、燃える御言葉の剣を携えて(黙 19:15)、イスラエルの勝利のために、永遠の「神の国」を建てるために、天から地に、神の側から人のところに降りて来てくださいます。その日、イスラエルの民は非常な恐れをもってこの御方を迎えることになります。なにしろ自分たちがかつて十字架で殺した御方が本当のメシアだったのであります。そして大いに恥じ入り、嘆願の霊に満たされて御前にひれ伏すことでしょうか。ここでの弟子たちの抱いた「恐れ」はその事実を指し示す「型」となっているのです。

このように「隠されていた」ものとは、イエシュアが来られ、再び来られることによって成し遂げられる神のご計画であり、それは「永遠」の昔から定められた、人に「永遠」のいのちをお与えになるものであり、それはただ主イエシュアが人の世に、地上に来られることによってのみ成し遂げられるのだということがここには奥義として秘められ、指し示されているのです。

この事実、この真実を受け、私たち人がなすべきことはただ一つです。それは「主イエシュアよ、来てください。」とその御名を呼び求めることだけです。自分で何とかできる、または自分にはやりたいことがある、今を生きること执着している人はこれгаできません。イエシュアの知恵や知識、奇蹟を行う力だけを求める人もまた同じです。「永遠」の「いのちの木」であられるイエシュアが、この地に来られること、これ以外に救いはなく、解決はありません。未だイスラエルはこの事実から目が隠されており、自分たちの行いによる義によって、自らの力で神に相応しい者となることでメシアを来させようとしています。彼らのメシア待望は完全に順序が逆になっているのです。解決の後にメシアが来るのではなく、すべての問題、すべての誤り、その解決のためにメシアは来られるのです。そして彼らには最も重要な事実が今なお隠されています。それはイエシュアこそ自分たちの待ち望んでいるメシアであるということです。

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

13:35 見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。』

やがて起こる世の終わりの三年半におよぶ大きな患難の中で「見よ、おまえたちの家は見捨てられる」と言われたイエシュアの預言はイスラエル、ユダヤ人たちの上に成就します。黙示録の獣と呼ばれる反キリストによって彼らの家、エルサレムの神殿は奪われ、汚され、史上最大最後の大虐殺が行われます。しかしその時こそ彼らがまことのメシアであるイエシュアに向かって「『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』』』』」と言う時でもあり、イエシュアを見る時、すなわちイエシュアが来られる時であることがここ

には預言されているのです。このイエシュアの地上再臨を、私たち教会はすでに天に引き上げられた聖徒、イエシュアにつき従う天の軍勢として見ることとなります。復活した身体、まさに永遠のいのちを持った状態でこれを見ることとなります。前回取り上げた箇所はその携挙された者たちについての言及がありました。その続きとして今日の箇所が記されていることを覚えてください。つまり、まず携挙が起こり、その後地上再臨が起こるとということが示されているのです。

このように、主イエシュアの訪れ、再び来られることを覚え、待ち望み、告げ知らせる。「主イエシュアよ、来てください。」この思い、この祈りが今を生きる私たちのなすべき一事となりますように。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

22:16 「わたしイエスは御使いを遣わし、諸教会について、これらのことをあなたがたに証した。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」

22:17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」これを聞く者も「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。

22:18 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、この書に書かれている災害を加えられる。

22:19 また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。

22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

22:21 主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。